研究ノート

「正史」としての「東京裁判史観」

加　藤　一　郎*

〈はじめに〉

5，6年前から，「太平洋戦争＝大東亜戦争私論」というテーマで，毎年おもに1，2年生200名程度を対象として，大東亜戦争を中心とした日本の近現代史を再検討するという講義を行ってきた．

もとより，一介の怠惰なヨーロッパ史家にすぎない私が，たとえ「世界史的な視野から考察する」という注釈づきであるにせよ，まったく専門外の分野である日本の近現代史を一般教養科目の講義テーマに選んできたのには，二つの事情がある．

第一の事情は，学生諸君の多くが，近現代史の分野に関しては，特定の事実，例えば，ナチス・ドイツによるユダヤ人虐殺や，日本軍が行なったとされてきたいわゆる「南京事件」，「731部隊」などについては断片的な知識を（それも教科書程度の）持ってはいるが，ナチズムがドイツ国民の圧倒的支持を得た背景，日本の朝鮮半島・満州地域への進出の国際的背景，ひいては大東亜戦争の世界史的な背景についてほとんど明確なイメージを持っていないことに気付いたためである．すなわち，学生諸君は，古代ローマとカルタゴが戦ったポエニ戦争の原因，中央ヨーロッパを舞台とした30年戦争の原因，鎌倉幕府滅亡の原因などという古代中世史の諸問題については，歴史学的には解釈の余地があるにせよ，かなり客観的な説明をすることができるのに対して，ヨーロッパにおける第二次世界大戦の原因，大東亜戦争の原因といった問題になると，突然，ヒトラーの世界制覇の野望とか，日本のアジア侵略の野望とかいうような，情緒的＝非歴史的な説明しかできなくなってしまうが，それは，学生諸君が高校までに受けてきた歴史教育に起因するのではないかと考えるにいたったためである．

第二の事情は，第二次大戦に関する学生諸君の情緒的＝非歴史的なイメージが今日までの公教育における歴史教育に起因するとすれば，そのイメージを訂正する，あるいはそれまでの固定観念＝「マインド・コントロール」に疑問を抱かせる機会＝舞台は，きわめて限られてしまっているためである．第一に，小学校から中学校ひいては高等学校までの公教育での歴史教育は，とくに近現代史の分野に限定すれば，第二次大戦の戦勝国による歴史解釈（我が国では，いわゆる「東京裁判史観」）にもとづいているために，この舞台となりえない．第二に，大学での歴史研究，歴史教育を担当する教員の多くも（私も含めて），社会主義的＝マルクス主義的歴史学，あるいはアメリカン・デモクラシー的な価値観のなかで育ち，その恩恵を享受してきており，しかも，制度的に専門領域にタコツボ化されているために，大学での歴史教育もなかなかその舞台たりえない．第三に，新聞やテレビ報道のなどのマスコミュニケーションも，一部の例外はあるにせよ，敗戦後の日本では占領軍の検閲政策にもとづく「東京裁判史観」の枠内の中で，成立・発展してきたもの

* かとう　いちろう　文教大学教育学部

である以上，その舞台たりえない．すなわち，「東京裁判史観」は，我が国の公的な場では，「正史」となっており，それを批判する歴史解釈は裏の舞台，ややもすれば「オフレコ」のなかでしか語られることのない「偽史」と扱われている．かつて，戦勝国による占領下のもとで東京裁判が開かれていたとき，のちに「東京裁判史観」として定着する戦勝国による歴史解釈を自由に批判し，日本の言い分を申し立てることができる場は，市ヶ谷の法廷だけであるという奇妙な状況が生じていたが，半世紀を経た今日でも，とくに歴史教育の分野では，「東京裁判史観」に意義を申し立てる舞台は極端に少ないのが実情である．

こうした事情から，少なくとも，「世界史的な視野の中で」大東亜戦争を，ひいては日本の近現代史を学生諸君に語っておかなくてはならないと考えて，講義を準備してきた．

以下が，私の講義概要である．

「太平洋戦争＝大東亜戦争が終了してから半世紀が過ぎ去ろうとしている．だが，この戦争の歴史的な意味については，戦争の呼称自体が定まっていないように，いまだ多くの人々の議論を呼んでいる．

とくに，日本を打倒した後に，連合国諸国が開いた極東軍事裁判（東京裁判）では，この戦争が一方的に日本の侵略戦争と断罪され，戦争の指導者が処刑されてしまい，この解釈（東京裁判史観）が戦後の教育やマスコミに持ち込まれたために，今日にいたるまで，この戦争が持っていた世界史的な意義を客観的に考察することがなされてこなかった．

本講義では，このような東京裁判史観と決別し，太平洋戦争＝大東亜戦争の歴史的意味を 15-16 世紀のヨーロッパとアジアの接触以降のグローバルな世界史の舞台の中で考察してみたい．

予定する講義テーマは以下のとおりである．

(1) 戦争の名称問題と東京裁判史観の定着
(2) ヨーロッパ諸国によるアジアの植民地化（コロンブスから阿片戦争・ロシアの南下まで，明治維新期における日本の国際環境）
(3) 東アジアにおける日米の対立（アメリカの西進，門戸開放政策，ワシントン会議）
(4) アメリカにおける排日運動（パリ講和会議での人種問題と日本，戦争の心理的側面）
(5) 満州問題（満州とは，シナにおける民族主義の高揚，満州事変と満州国の成立）
(6) 開戦前夜（ヨーロッパ大戦の勃発と日米関係，最後の日米交渉）
(7) 「アジアの解放」という理念（インドネシア独立運動，ビルマ独立義勇軍，インド国民軍，大東亜会議）」

年度によって若干の相違はあるものの，基本的に上記の内容にそった講義をしたうえで，「本講義を聞いて，太平洋戦争＝大東亜戦争に関する従来のイメージがどのように変化しましたか．具体的な事例をあげて述べなさい」とのアンケートを行なってきた．その結果学生からよせられた回答は，彼らが大東亜戦争やその関連事項に関してどのようなイメージを抱いてきたか，あるいは抱かされてきたかを明らかにすると同時に，「東京裁判史観」が戦後の歴史教育にどの程度定着しているのかを判断する格好の資料となっている．以下，項目に分類しながら，学生の回答を整理してみよう（学生の答案については，明らかな誤字，「てにをは」の誤り以外は，原文どおり引用した）．

〈学生の回答から〉

(1) これまで，太平洋戦争＝大東亜戦争にどのようなイメージを抱いてきたか？

・「小学校から今まで，太平洋戦争について，日本が今までどの様に悪いことをしてきたのかを，朝鮮の人たちを虐殺してきた事や侵略戦争という言葉によって教えられてきた，そして日本がやってきたことはすべて

悪なので，これからは謝罪の気持ちを持たなければならないとされてきた.」(教育学部1年)

- 「私はこの講義を受けるまではやはり太平洋戦争は自分が日本国民でありながらも，日本が一方的に悪いと思っていました．なぜなら，いままでに学校で習ったことは，ほとんどが日本が犯した侵略行為についてだったからです.」(文学部1年)
- 「私は太平洋戦争といえば，日本の侵略戦争だったとずっと思っていた．なぜなら，小学校，中学校，高等学校で学んだ歴史がそうだったからだ.」(文学部1年)
- 「高校までの教育では，日本はアジアを侵略したと習い，日本は悪者となっていて，反省すべきであると教わった.」(文学部1年)
- 「私は，高校の日本史の授業で1年の2/3を太平洋戦争について学習したことがある．そのときの先生はとても熱心に日本は太平洋戦争中に様々な悪事をしてきたのだということを語っていました．正直言って気分の良い授業でなかったことを今でもはっきりと覚えている.」(人間科学部2年)
- 「私は太平洋戦争とは日本が一方的に悪いものだと思っていました．特に，日本のその当時の首相やその関係者たちはなんて無責任で無謀な人たちだろうと考えていました．東条英機など殺（死刑）されて当然だと思っていました.」(文学部2年)
- 「私が高校2年のときの日本史の先生も，特に太平洋戦争について力を入れている先生でした．しかし，その先生の場合は，先生の個人的な思想も絡んでいたせいか，『日本＝凶悪犯罪を犯した許されざる国』というような内容でした.」(人間科学部2年)

(2)　東条英機についてどのようなイメージを抱いているか？

- 「東条首相に対しては，今までは一人でいばって，日本を戦争にむりやりに引っ張っていった悪い奴という印象であったのに，今では，彼もあんな状態のときに首相になんかなってしまって，やむをえない選択だったのかも，なんだかかわいそうと同情する気持ちとともに，彼の遺言に感動しました．普通なら言い訳だってたくさんあるはずなのに,一言も家族に語らせないその男気に，胸を打たれました.」(文学部1年)
- 「東条首相も今まで日本を戦争に導いた悪人のようなイメージがあったが，重光外相の将来を見通した意見を取り入れ，精力的に東南アジアの首相や自由インド仮政府主席チャンドラ・ボースと会談し，…….しかし，この事実を日本人はほとんど知らないのではないだろうか.」(文学部1年)
- 「私の中では，軍人である東条が首相になったから日本は軍国主義の道を進んでいったのだと思っていた．しかし，日本が敗戦国となり，東条自身戦犯となって東京裁判で裁かれることになっても，家族に『この戦争について何も話すな』といったことは首相としてすべてを受け入れた態度だと感じた．東条の息子に担任がつかないで，校庭で，一人で遊んでいたという話を聞いて，ここにも戦争の被害者がいると痛切に感じた.」(人間科学部2年)

(3)　大東亜戦争という呼称やその由来を知っているか？

- 「講義を聞く以前は，大東亜戦争という言葉を耳にしたことがありませんでした．この戦争は，太平洋戦争と呼ぶのが普通だと思っていました.」(文学部1年)
- 「私は正直，この講義を受けるまで“第二次世界大戦”“太平洋戦争”という名称しか知らず，日本がこの戦争を“大東亜戦争”と呼んでいたことは知りませんでした.」(文学部2年)

・「私は今まで太平洋戦争はあくまでも太平洋戦争であり，大東亜戦争という呼び方を意識したことがなかった．講義で大東亜戦争という言葉を聞いたとき，やはり私の頭に浮かんだイメージとは天皇万歳の世界や戦争賛美のイメージだった．なぜそんなイメージを抱いてしまうのか自分でも不思議に思い中学校の歴史の教科書と高校の世界史の妹の高校の日本史の教科書を読み返してみた．すると，中学の教科書では日本の侵略戦争というものをかなり強調した内容になっていて，『ドイツの侵攻にならって，日本も・・・くわだてた』という文章もあって，笑ってしまったが，こういう内容の教科書を使っていては，そういうイメージができてしまうのも無理はないと感じた．」(文学部２年)
・「“大東亜戦争”という名称は，私の祖母がよく使うことばなので以前から知っていたが，“大東亜戦争”と“太平洋戦争”の違い，つまり“太平洋戦争”という名称はアメリカが強制したものだということは初耳だった．」(人間科学部２年)
・「私は本講義を受ける前までは，大東亜戦争＝太平洋戦争，すなわち大東亜戦争＝第二次世界大戦だということすら知らなかった．」(文学部１年)

(4) 東京裁判史観についてどの様に考えているか？
・「東京裁判史観で 50 年たつ現在も教育されていたのだと驚いた．これからはもっと客観的に大東亜戦争について日本もアメリカも中国も考えてもいいのではないか．」(教育学部１年)
・「東京裁判のおかげで，日本人は罪の意識を持つようになってしまった．私も今までの日本の行為をはずかしく思っていた．これは一種のマインド・コントロールである．」(文学部１年)
・「日本がただ悪いのだと思わせてしまうような歴史を教えるのは早く止めるべきです．」(文学部１年)

〈結　語〉

上記の例からもわかるように，大半の学生が，私の講義に接するまでは，大東亜戦争は日本の侵略戦争であり，日本は悪者であったというイメージを抱いている．また，「東京裁判史観」で，その侵略戦争の首謀者とされている開戦時の首相東条英機の人物像についても，上記の例を見る限り，大半の学生諸君は，一度も東条の発言や具体的な活動について知ることもなく，たんに「悪の権化」とみなしていることが判る．しかも，そのようなイメージが，「東京裁判史観」による「マインド・コントロール」によるものであったことすら，自覚していない．

具体的事例に移れば，戦争の呼称問題については，公教育での教科書やマスコミは「太平洋戦争」という呼称しか使用せず，せいぜい中学校・高等学校の教科書の欄外の注記で「大東亜戦争」という呼称が登場するだけであるのだから，「大東亜戦争」という呼称が，戦前・戦中世代を除けば，「死語」と化しつつあるのは当然である．まして，この呼称問題には戦争の大義名分問題が絡んでおり，占領軍が「大東亜戦争」という呼称の使用を禁止したという歴史的経緯について，学生諸君が知るよしもないのは不思議ではない．また，アメリカのハワイ併合については高校世界史の教科書には登場するものの，それがアメリカの帝国主義的な西進との脈絡の中で扱われないために，「まず，おどろいたのがハワイ王国の併合である．アメリカがハワイに対し行なった行為は日本が行なった韓国併合と何ら違わない．一方的にアメリカがハワイ王国を併合したのである．このことが戦後世代である私達に知られていないのは，戦後アメリカ側が情報操作したためである．このへんが，

アメリカのずるがしこい所だと思った.」(教育学部１年) との回答がある.

以上のような学生諸君の回答から判断すると，占領軍による東京裁判史観にもとづく「マインド・コントロール」はほぼ完璧に成功しているといえる. そして，この「マインド・コントロール」の尖兵となったのが，「先生はとても熱心に日本は太平洋戦争中に様々な悪事をしてきたのだということを語っていました」との回答が象徴しているように，高校までの歴史教育であった.

しかし，残念ながら，この「東京裁判史観」の支配を克服することは，きわめて困難であろうと思われる. それは，敗戦国である日本が，戦勝国を中心とした戦後の国際秩序のなかで，生き抜くためには，「東京裁判史観」も含むその文化的・歴史的価値観（「正史」）に迎合せざるをえなかったし，今後も迎合していくであろうからである. 突飛な事例であるが，学校教育の吹奏楽バンドは「星条旗よ永遠なれ」とかアメリカ海軍の軍歌「錨をあげて」といった曲を演奏し，一方，国歌「君が代」の斉唱や国旗「日の丸」掲揚の是非が議論されている（日本海軍の軍歌「軍艦マーチ」にいたっては，それを演奏しただけで，公教育の現場から追放されることであろう). おそらく，後世の歴史家は，このような「奇々怪々な」光景を日々繰り広げている戦後の日本を戦勝国の「傀儡国家」，あるいは「傀儡政権時代」とみなすことであろう. 歴史的事例を探れば，戦後の日本は，ナチス・ドイツに占領されたフランスにおける傀儡政権ヴィシー政府とほぼ同様の位置を占めている. わずか４年間のヴィシー政権のもとでも，多くのフランス人が，生き抜いていくために「対独協力者」にならざるをえなかったとすれば，半世紀も続こうとする戦後の我が国の傀儡政権のもとでは，当然にも，大半の日本人が物質的な利益を享受するためにも「協力者」とならざるをえなかった. 歴史教育の分野では，「東京裁判史観」を「正史」として受け入れ，それに迎合することが歴史研究者，歴史教育担当教員の社会的地位と経済的な安定を保証してきたし，「正史」を批判する歴史解釈は「偽史」として断罪されてきた. このような状況は，戦勝国を中心とした国際秩序が今後も続き，敗戦国国民もそこから物質的な利益を享受している限り，短期的にはほとんど変らないであろう.

それにつけても，ある教職志望の学生が「ほとんどの日本人が，その意味さえも知らずに無意識のうちに東京裁判史観をうえつけられ，とらわれている. 私もその一人だったのですが. 教育者を目指す私にとって，この問題が教育界に浸透しているなかで，子供達にいかに伝えるべきなのか悩みます」(教育学部１年) と述べているのを見ると，無力な一介のヨーロッパ史家にすぎない私の胸も痛むのである.

Studa noto La “historia koncepto de Tokia Juĝo” kiel la “ortodoksa historio”

KATO Iĉiro

<Antaŭparolo>

Dum 5, 6 jaroj ĝis nun al ĉirkaŭ 200 studentoj, ĉefe la unua kaj la dua klasaj, mi ĉiujare prelegis la historion de la Granda Milito de Orienta Azio sub la titolo “la privata vidpunkto pri la Pacifia Milito aŭ la Granda Milito de Orienta Azio” por rekonsideri la japanan modernan historion.

Estas du kialoj pri tio, ke mi, estante nur maldiligenta historiisto pri Eŭropo, kuraĝis selekti la japanan modernan historion, kiu sendube ne estas mia fako, kiel la temon de mia prelego, se eĉ kun la komento “el la mondhistoria vidpunkto”.

La unua kialo estas, ke en la kampo de moderna historio plimulte da studentoj havas fragmentajn scikonojn pri specifikaj okazintaĵoj, ekzemple, la buĉado de judoj per Naziista Germanio, la “Nankina okazintaĵo”, sed ili ne havas klaran imagon pri la fono de la entuziasma subteno de la Naziismo per la germanoj, kaj pri la internacia fono de la japana miritoiro al Korea duoninsulo aŭ Manĉurio kaj pri la mondhistoria fono de la Granda Milito de Orienta Azio. Studentoj povas objektive klarigi la diversajn problemojn de antikva kaj mezepoka historio, ekzemple, la kaŭzon de la Poenia Milito inter antikva Romo kaj Kartago, la kaŭzon de la 30- jara Milito en Centra Eŭropo, kaj la kaŭzon de la pereo de Kamakura ŝoguna registaro. Sed kiam temas pri la problemoj, ekzemple la kaŭzo de la dua mondmilito en Eŭropo kaj la kaŭzo de la Granda Milito de Orienta Azio, ili subite fariĝas nekapablaj objektive klarigi tiujn kaŭzojn, kaj nur povas montri emociajn = nehistoriajn klarigojn, ekzemple, la personan ambicion de Hitler, la japanan konkeran ambicion de Azio. Mi opinias, ke tiun emocian = nehistorian sintenon enkodukis kaj enkondukis la historia instruado de publika endukado, kiun studentoj ricevis en elementa lernejo, mezlernejo kaj altgrada lernejo.

La dua kialo estas jena. Se la emocian = nehistorian imagon pri la dua mondmilito de studentoj enkondukis la historia instruado en publika edukado, estas treege limigitaj la ŝancoj aŭ scenejoj, kiuj utiligeblus por korekti tiun imagon aŭ suspekti ĝisnunan fiksitan koncepton, “mensan kontroladon”. Unue, la historia instruado de publika edukado en elementa lernejo, mezlernejo kaj altgrada lernejo nature ne povas aldoni tiun ŝancon aŭ scenejon, ĉar ĝi mem bazitas sur la historia intrepreto konstruita de venkintaj ŝtatoj en la dua mondmilito (la “historia koncepto de Tokia Juĝo” en nia lando). Due, la historia instruado en universitato ne povas esti tiu scenejo, ĉar plimulte da instruistoj (inkluzive de mi), kiuj estas ŝarĝitaj per la historia instruado en universitato, kreskas kadre de la valoroj bazitaj sur la socialista = marksista historiografio aŭ usana demokratio, kaj akiras profitojn kadre de tiuj valoroj. Trie, eĉ se kun kelkaj esceptoj, amaskomuniko (gazetaro kaj televidigo) ne povas esti tiu sĉenejo, ĉar post la malvenko de Japanio ĝi formiĝis kaj evoluis kadre de la cenzura politiko de la okupanta armeo, kaj kadre de la “historia koncepto de Tokia Juĝo”. Nome, en nia publika scenejo, la “historia koncepto de Tokia Juĝo” estas la “ortodoksa historio”, do nur en malpublika scenejo, precipe nur en senregistada scenejo oni povas ekdiri la historian intrepreton, kiu kritikas ĝin kaj fariĝas la “pseŭda historio”. Kiam Tokia Juĝo okazis en Japanio okupita de venkintaj ŝtatoj, la scenejo de Tokia Juĝo en Iĉigaja estis nur la scenejo, kie oni libere povis kritiki la historian intrepreton, kiu poste estos fiksita kiel la “historia koncepto de Tokia Juĝo”, kaj libere povis klarigi la japanajn vidpunktojn. Tio estis strangega situacio. Sed nun post duonjarcento estas tre malmuta la ŝanco aŭ

scenejo, kie oni povas kritiki la "historian koncepton de Tokia Juĝo", precipe en la historia instruado.

Bazitante sur tiuj kialoj, mi preparis prelegon, konsiderante ke necesas rekonsideri la Grandan Militon de Orienta Azio aŭ la japanan modernan historion almenaŭ el la mondhistoria vidpunkto.

La esenco de mia prelego estas jena.

"Pasis duonjarcento de kiam la Pacifika Milito aŭ la Granda Milito de Orienta Azio finiĝis. Sed kiel montras la fakto ke la nomo mem de tiu milito ne estas fiksita ĝis nun, oni disputadas pri la historia senco de tiu milito.

Post la malvenko de Japanio, Ekstrem-Orienta Milita Juĝo (Tokia Juĝo) fondita de venkintaj ŝtatoj tropartiece kondamnis Japanion pro agresiva milito kaj ekzekutis japanajn mlitajn gvidantojn. Kaj okupanta armeo enkondukis tiun interperton de la milito (la historia koncepton de Tokia Juĝo) en postmilita japana edukado kaj amaskomuniko. Konsekvence, ĝis nun la mondhistoria senco de la milito ne estas objektive konsiderata.

Mi intencas rekonsideri la historian sencon de la Pacifika Milito aŭ la Granda Milito de Orienta Azio sur la granda mondhistoria scenejo post la 15, 16 centjara kontakto inter Eŭropo kaj Azio, forlasinte la historian koncepton de Tokia Juĝo.

La temoj de mia prelego estas jena.

(1) La problemo pri la nomo de la milito kaj la fiksiĝo de la historia koncepto de Tokia Juĝo.

(2) La koloniado de Azio per eŭropaj ŝtatoj (de Kolombo ĝis la Opia Milito kaj la rusa sudeniro, la internacia medio de Japanio en la periodo de Meiĝi Renovigo).

(3) La antagonismo inter Japanio kaj Usono en Orienta Azio (la usona okcidenteniro, la politiko por malfermi pordon, la Vaŝingtona kongreso).

(4) La antijapana movado en Usono (la rasaj problemoj en Pariza paĉa kongreso kaj Japanio, la psikologia flanko de la milito).

(5) La Manĉuria problemo ("Manĉurio", la levigo de naciisma movado en Ĉinio, la manĉuria konflikto kaj la formiĝo de Manĉuria ŝtato).

(6) La antaŭa nokto de komenciĝo de la milito (la komenciĝo de la eŭropa milito kaj la japan-usona rilato, la lasta traktado inter Japanio kaj Usono).

(7) La ideo "Liberigo de Azio" (la Indonesia sendependeca movado, la Birma sendependeca memvola armeo, la Hinda nacia armeo, la Granda Orienta Azia kongreso).

Post mia prelego, mi demandis al studentoj, "Kiel ŝanĝiĝis via imago pri la Pacifika Milito aŭ la Granda Milito de Orienta Azio?" La respondoj de studentoj utiligeblas kiel bonaj materialoj, kiuj povus montri, kian imagon pri la Granda Milito de Orienta Azio kaj la rilatoj temoj havis aŭ havas studentoj, kiagrade fiksiĝas la "historia koncepto de Tokia Juĝo" en la postmilita historia instruado. Mi klasifikas jene la respondojn de studentoj laŭ kelkaj temoj.

<El studentaj respondoj>

(1) Kian imagon pri la Pacifika Milito aŭ la Granda Milito de Orienta Azio vi havis ĝis nun?

"Ekde la tempo de elementa lernejo ĝis nun oni instruis al mi, ke Japanio faris malbonaĵojn, masakrinte la koreanojn kaj farinte agresivajn militojn. Mi sentis, ke la japanoj devas pardonpeti, ĉar ĉiuj, kiujn faris Japanio, estis malbonaj. "(la unua klasa studento de eduka fakultato).

"Ĝis mi aŭskultis vian lekcion, mi konsideris, ke nur Japanio estis malbona en la Pacifika

milito, malgraŭ tio ke mi mem estas japanino. Ĉar ĉiuj, kiujn oni instruis al mi en lernejoj ĝis nun, estis agresivaj agadoj faritaj de Japanio." (la unua klasa studentino de literatura fakultato)

"Mi delonge konsideris ke la Pacifika Milito estis la japana agresiva milito, ĉar la historio, kiun oni instruis al mi en elementa lernejo, mezlernejo kaj altgrada lernejo, konkludis tion." (la unua klasa studento de literatura fakultato)

"En la historia instruado ĝis altgrada lernejo, oni instruis al mi, ke Japanio invadis Azion kaj devas repripensi, ĉar Japanio estis kanajlo." (la unua klasa studento de literatura fakultato)

"Oni dediĉis du sur tri historian instruadon al la Pacifika Milito en la unua klaso de altgrada lernejo. Tiam la instruisto de la japana historio tre fervore diris, ke Japanio faris diversajn malbonaĵojn en la Pacifika Milito. Konfesinde mi klare memoras, ke tiu instruado ne estis agrabla." (la dua klasa studentino de humana scienca fakultato)

"Mi konsideris, ke Japanio estis la plej malbona en la Pacifika Milito. Laŭ mia penso tiutempaj japanaj ĉefministroj kaj proksimuloj estis treege senrespondecaj kaj senkonsideraj, kaj do nature TOĜO Hideki kaj aliaj estis ekzekutitaj." (la dua klasa studentino de literatura fakulutato)

"Kiam mi estis la dua klasa studento de altgrada lernejo, mia instruisto de la japana historio tre energie instruis la Pacifikan Militon. Sed lia instruado estis ke Japanio estas la nepardonebla krima lando el sia vidpunkto. (la dua klasa studento de humana scienca fakultato)

(2) Kian imagon vi havas pri TOĜO Hideki?

"Laŭ mia ĝisnuna imago ĉefministro TOĜO estis aroganta kaj malbona, kaj perforte devigis Japanion komenci militon. Sed nun mi komprenas lian agadon en tiutempa situacio, kaj simpatias lin. Samtempe mi estis treege kortuŝata de lia testamento, ĉar li havis multajn opiniojn por sinpledi, sed instrukciis siajn familianojn ne sinpledi." (la unua klasa studentino de literatura fakultato)

"Laŭ mia ĝisnuna imago ĉefministro TOĜO estis malbona viro, kiu enkondukis Japanion al la vojo de milito. Sed fakte, li aprobis la klarvidan konsideron de la ministro pri eksterlandaj aferoj SIGEMITU, kaj energie konversaciis kun la gvidantoj de Orient-Suda Azio kaj Ĉandra Bose, la ĉefo de la provizora registaro de Libera Hindio .... Ĉu nuntempe la japanoj scias tiun fakton?" (la unua klasa studento de literatura fakultato)

"Mi konsideris, ke Japanio iris al la vojo de milito pere ĉefministro TOĜO. Post la japana malvenko TOĜO mem fariĝis milita krimulo kaj estis juĝita en Tokia Juĝo. Sed li instrukciis siajn familianojn paroli nenion pri tiu milito kaj akceptis respondecon kiel ĉefministro. Mi estis tre kortuŝita de lia sinteno. Kiam mi aŭskultis, ke lia filo sole ludis en lerneja ĝardeno, ĉar neniu instruisto akceptis lin kiel sian lernanton de sia klaso, mi sentis ke li ankaŭ estis la suferanto de la milito." (la dua studento de humana scienca fakultato)

(3) Ĉu vi scias la nomon kaj devenon de la "Granda Milito de Orienta Azio"?

"Mi neniam aŭskultis la vorton "Grandan Militon de Orienta Azio" ĝis via leciono. Mi konsideris, ke estas ordinare nomi tiun militon la Pacifika Milito." (la unua klasa studentino de literatura fakultato)

"Verdire mi sciis nur la nomojn 'la duan mondmiliton', la 'Pacifikan Militon' ĝis via leciono, kaj ne sciis, ke Japanio nomis tiun militon la 'Granda Milito de Orienta Azio'." (la dua klasa studento de literatura fakultato)

"En mia koro ĝis nun la Pacifia Milito estis la Pacifika Milito, kaj neniam aperis la nomo

'Granda Milito de Orienta Azio.' Kiam en via leciono mi aŭskultis la nomon 'Grandan Militon de Orienrta Azio', la imago, kiu aperis en mia koro, estis la imago de la kulto de la japana imperiestro kaj la imago de la glorigo de milito. Mi suspektis, kial mi havas tian imagon, kaj legis la historian lernolibron de mezlernejo kaj la mondhistorian lernolibron de altgrada lernejo. La lernolibro de mezlernejo substrekas la agresivecon de Japanio. kaj diras, 'Same kiel Germanio invadis, Japanio planis....'. Mi ridis pro tiu teksto. Laŭ mia opinio, ni nature formus tian imagon, se ni uzus tian lernolibron." (la dua klasa studento de literatura fakultato)

"Mi scias la nomon 'Grandan Militon de Orienta Azio', ĉar mia avino ofte uzis ĝin. Sed mi ne sciis la diferencon inter la 'Granda Milito de Orienta Azio' kaj la 'Pacifika Milito' kaj la fakton ke Usono devigis nin uzi la vorton 'Pacifikan Militon'. (la dua klasa studentino de humana scienca fakultato)

"Mi neniel sciis la fakton, ke la Granda Milito de Orienta Azio estis la Pacifika Milito, nome, la Granda Milito estis la dua mondmilito." (la unua klasa studento de literatura fakultati)

(4) Kiel vi opinias pri la historia koncepto de Tokia Juĝo?

"Min surprizas la fakto, ke oni instruas la historian koncepton de Tokia Juĝo al ni eĉ post 50 jaroj. Depost nun aŭ Japanio aŭ Usono aŭ Ĉinio devas pli objektive konsideri la Grandan Militon de Orienta Azio." (la unua klasa studento de eduka fakultato)

"La japanoj fariĝis havi la senton de pardonpeto pro la historia koncepto de Tokia Juĝo. Tiu situacio estas iuspeca "menso-kontrolado". (la unua studento de literatura fakultato)

"Nuntempe treege necesas forlasi la historian instruadon, kiu instruas nur la malbonecon de Japanio." (la unua klasa studentino de literatura fakultato)

＜konkludo＞

Kiel montras suprecititaĵoj, la plejmulte da studentoj havis la imagon, ke la Granda Milito de Orienta Azio estis la japana agresiva milito, kaj Japanio faris multajn malbonaĵojn ĝis ili aŭskultis mian lekcionon. Laŭ la historia koncepto de Tokia Juĝo, TOĜO Hideki, la ĉefministro de la komenciĝo de la milito, fariĝis la ĉefkrimulo de la agresiva milito. La plejmulte da studentoj neniel scias la opiniojn kaj agadojn de TOĜO, nur konsideras lin kiel la "enkarniĝon de la malbono". Krome ili ne memkonscias la fakton, ke tian imagon enkodukis la "menso-kontrolado" bazita sur la historia koncepto de Tokia Juĝo.

Ni transiru al konkretajn problemojn. En lernolibroj de publika edukado kaj en amaskomuniko estas uzata nur la nomo "Pacifika Milito". La nomo "Granda Milito de Orienta Azio" aperas nur en komentoj de lernoliboroj de mezlernejo kaj altgrada lernejo. Do, estas nature, ke la nomo "Granda Milito de Orienta Azio" fariĝas "mortinta vorto". Kaj estas ankoraŭ sendube, ke studentoj neniel scias la historian procezon, ke la okupanta armeo malpermesis uzi la nomon "Grandan Militon de Orienta Azio", ĉar ĝi kuniĝis kun la japana ideala celo de tiu milito. Kaj la anekcio de Haŭajo per Usono aperas en la mondhistoria lernolibro de altgrada lernejo, sed oni ne kunigas tiun okazintaĵon kun la usona imperialisma okcidenteniro. Do, iu studento diris, "Unue min surprizis la anekcio de Haŭajo. Neniel ekzistas la diferenco inter la anekcio de Haŭajo per Usono kaj la anekcio de Koreo per Japanio. Usono perforte anekcis la reĝlandon de Haŭajo. Ni, la postmilita generacio, ne scias tiun okazintaĵon pro la usona informa manipulo" (la unua studento de eduka fakultato).

Juĝante laŭ la suprecititaj respondoj de studentoj, ni povas konkludi, ke la "menso-kontrolado" bazita sur la historia koncepto de Tokia Juĝo de la okupanta armeo komplete

sukcesis. Kaj la historia instruado de publika edukado estas la entuziasma praktikanto de tiu "menso-kontrolado, kiel simbolas jena respondo de iu studento. "La instruisto fervore diris, ke Japanio faris diversajn malbonaĵojn en la Pacifika Milito".

Sed laŭ mia opinio, bedaŭrinde, estas tre malfacile renversi la superregon de la historia koncepto de Tokia Juĝo. Ĉar Japanio, estinte la venkita ŝtato, devis, devas kaj devos sin adapti al la kulturajn kaj historiajn valorkonceptojn inkluzive de la historia koncepto de Tokia Juĝo (la "ortodoksa historio"). Dum en la nuna lerneja edukado latuninstrumenta bando ludas "Ni eternigu Stel-Strian Flagon!", la usonan mararmea militkanton "Malankrante!", oni disputas pri la problemoj, ĉu ni devus kanti la japanan ŝtatan kanton "Kimigajon", ĉu ni devus hisi la japanan ŝtatan flagon "Hinomaruon". Tiu estas strangega situacio. Supozeble, estontaj historiistoj konsideros postmilitan Japanion, en kiu ĉiutage aperadis tiu strangega situacio, kiel la "marionetan ŝtaton" de la venkintaj ŝtatoj aŭ la "periodon de marioneta regpotenco". Laŭ la historia analogio postmilita Japanio estas tre simila al Vicia marioneta regpotenco, kiu formiĝis en Francio okupita de Naziista Germanio. Se sub 4 jara regado de Vicia regpotenco, multaj francoj fariĝis "kunlaborantoj de Germanio" por postvivi, sub la duonjarcenta japana marioneta regpotenco, estas kompreneble ke la plejmulte da japanoj devis fariĝi "kunlaborantoj" por akiri ekonomian profiton. En la historia instruado historiaj studantoj kaj instruistoj ne povus akiri la socian rangon aŭ la ekonomian profiton sen akcepti la historia koncepton de Tokia Juĝo kiel la "ortodoksan historion", kaj la historia intrepreto kritikanta la "ortodoksan historion" estas kondamnata kiel la "pseŭda historio". Tiu situacio daŭros, se la internacia ordo kontrolata de la venkintaj ŝtatoj, daŭros de nun, kaj se la nacianoj de la venkita ŝtato akiros ekonomian profiton pro tiu ordo.

Iu studentino, kiu celas fariĝi instruistino, diris jene. "Preskaŭ ciuj japanoj malkonscie estas instruataj kaj kaptataj de la historia koncepto de Tokia Juĝo, ne sciante ĝian veran sencon. Mi estas unu el tiuj japanoj. La demando, kiel instrui tiun problemon al infanoj, turmentas min, kiu celas fariĝi instruistino" (la unua klasa studentino de eduka fakultato). Tiu respondo turmentas ankaŭ min, kiu nur estas malforta historiisto pri Eŭropo.